

# 学校経営研究における生徒指導論の位置と課題

東京女子体育大学 西 穰 司

## I 課 題 設 定

近年、とくに中学校での校内暴力事件が多発する傾向が強まり、関係者は言うに及ばず、市民一般からも高い関心が払われている。こうした現状のなかで、改めて学校教育における生徒指導の実態や改善の方向をめぐって多様な論議が展開されている。しかし、その論議の内実をみると、現象的に浮き彫りにされた青少年の問題行動そのものに目を奪われ、その背後にある社会・文化的要因やとりわけ今日の学校教育が基底に抱えている問題状況を広い視野から検討するといった作業が、必ずしも適切になされているとはいえない。

そこで、本稿では学校教育における生徒指導問題を考究していく際の前提的な諸課題を明らかにし、今後のこの領域の研究の発展の一つの手がかりを得たいと考える。

ところで、わが国の戦後の教科外教育ないし生徒指導の領域で多くのすぐれた研究業績をものされ、また学校教育の実際界を指導してこられた人物の一人として宇留田敬一教授を挙げる<sup>(1)</sup>ことができる。本稿では、宇留田敬一教授の一連の生徒指導論を直接の対象にして、学校経営研究の一領域として、生徒指導論がどう位置づけられ、どのような方向において今後の研究の進展が期せられるべきか論究することとする。

もともと、生徒指導は学校教育の機能において教科指導と並ぶ重要な機能ではあるが、単なる学校の機能の領域として、またはその細目として学業指導、個人的適応指導、社会性指導、道徳性指導、進路指導、余暇指導等の分野ごとに論究されることが多かった。もちろん、このような各論的接近も意義あるものではあるが、今日求められる生徒指導論は、その背後にある学校自体の問題状況とその改善という広い視野からの接近である。つまり、どちらかといえば対症療法的生徒指導論ではなく、学校教育全体の構造や機能の把握を基底にした生徒指導論なのである。この点で、宇留田敬一教授は、1978年4月、筑波大学教育学系の教育経営学領域担当の教授に就任され、少なくとも社会的な立場においては前述したような視角から生徒指導論を展開されている最も適切な研究者とみることができるのである。

以上のような見地に立って、以下今日の学校経営研究において、生徒指導論が踏まえるべき前提的な諸問題を明らかにし(Ⅱ)、次に学校における生徒指導体制や機能の構造的位置とその改善

の基本方向について論究することとする(Ⅲ)。

## Ⅱ. 学校経営における生徒指導考究の前提

### 1. 生徒指導をめぐる今日の学校の問題状況の把握

今日の学校教育において生徒指導を問題とする際、単純に知識・技能の面での成人の地位・役割への社会化以外に、道徳的側面のそれ(価値態度の形成)も学校に期待されている機能であるとする一般的見地からだけでは、的確な生徒指導論は構成されがたい。なぜ、学校における「生徒指導」が今日問題視され、その解決の探究がどのような意義をもつのかを基本的に明らかにされていなければ、ごく常識的な論しか出てこないといわなければなるまい。

この点について、宇留田教授の最近の所説は相当鋭い論究がなされていて、示唆されるところが多い。たとえば、1980年の論稿「生徒指導と教育経営」の論稿では、現代社会の動向の特質と関連づけて、生徒指導をめぐる今日の問題状況が指摘されている。現代社会は、一面物質のあり余る「豊かな社会」であるが、もう一面では社会の管理のしくみが人間の自律性を失わせ、人間疎外という病理を併せもつ「高度生産社会」であるとか、その他情報化・都市化・高学歴といった特質をもつ社会であるにとらえ、こうした社会動向下で、青少年の適応や発達が妨げられ、<sup>(2)</sup> 深刻な様相を呈していると認識されている。また、同じく1980年に発表された別の論稿「生きることの教育」では、先の論点に加えて今日の家庭内暴力事件に象徴される非行や無気力傾向といった事態は、当時者自身の問題というよりは、現代の社会が青少年にそうした問題行動を惹起させるよう追いやっているとも指摘されている。<sup>(3)</sup>

もちろん、これらの論点は概ね有効ではあるが、筆者からみるとやや大雑把な論展開であるといえる。というのは、青少年の社会化ないしは発達についての家庭・学校・地域社会の諸環境との関連性を一定程度措定した上で先のような論究がなされているのではなく、社会動向が成人に与える影響力と同様な意味で青少年にも暗い影を落としているといった指摘になっているからである。もともと、課題が学校教育における生徒指導にあるのであるから、まず今日の学校環境が青少年にとってどのようなものとして存在するのかを明らかにし、次にその背景として家庭や地域社会および全体社会の動向や要因を把握するといったように、二段階に分けて緻密に論が展開される必要があると考えられる。もっとも、都市化社会や高学歴社会といった特質と関連づけて、今日の学校の問題状況(受験中心の弊害等)に言及されているが、やはり先に指摘したごとく論旨に明快さを欠いていることは否めない。

端的に言って、筆者は今日の学校が知識および技能面の社会化に追われ、しかもその中味がアチーブメント・テストで測定されうるような外在的な画一的基準によって判別される業績に著しく偏っていることが重大な問題であると考え。その背景として、全体社会が高度生産・情報化・都市化といった特徴をもつ、かつてとは比較にならないほどの規模と速さの社会変動が存在し

たと認識できる。いわば学校は、社会変動の影響力を直接受け、その対応に追われるあまり、トータルな青少年の形成力を弱め、主体的な存在理由をいっそうせばめてきたところに、大きな問題が存するとみることができる。<sup>(4)</sup>

要するに、学校の本来の機能が何であるかという議論を前提として、はじめて今日の生徒指導をめぐる問題状況の把握が可能になるのであり、この点で宇留田教授の所説は明快さに欠けるきらいがあるのである。たしかに教授は、「生きることの教育」の論稿において、「知識の学校から生活の学校へ」という考え方を提示しておられるが、先述したごとく論究の順序が逆転しているばかりか、学校の機能論としてもある程度の不十分さは免れない。というのは、次の点の把握に弱さを残しているからである。今仮にごく大雑把に「学校の機能は、知識・技能および道徳的側面における成人の地位・役割への社会化」ととらえられるとして、知識・技能の側面と道徳的側面との両者の関連構造が明瞭におさえられていないのである。

宇留田教授は、「生活の学校」の教育、それは「生きることの教育」であり、その本質は次の6点にあると指摘している。(1)単に生活の糧を得るすべを教えることではなく、まず第一に人間として生きることを学ばせる教育であり、さらには人間らしい人間を育てることを目指す教育である。(2)人間が生きることを自ら学び、人間らしい人間に自らを育てていく可能性をもつという人間観を前提としている。(3)経験を通して行われる。(4)子どもというものをおとなと比べて、欠陥をもつもの、何かが未成熟であるがゆえに、できるだけ早く完成品であるおとなにつくり変えなければならないと考える子ども観、さらには人間観を否定する。同時に子どもを天使のように純粹でインソセントなもの、完全無欠なものという考え方を否定する。(5)子どもたちに学校において協働する社会を築かせ、そのなかで生きることを学ばせる。(6)子どもたちそれぞれが多様な問題をもって生きていること、また子どもは自分なりにその解決を図ろうと努めていることを前提としながら、さらに教師はその解決のために、必要な援助を子どもの問題に即して提供しなければならないという考え方に立つ。<sup>(5)</sup>

このような本質を備えた教育が、今日の学校において期待されると宇留田教授は指摘されるのだが、この学校の機能論は、哲学的な一つの立場としては意味あるものといえよう。しかし、ある意味で青少年が将来自立した成人として生活するための糧(手段)―筆者はそれを3 R's が基底となる知識・技能という業績と解する―が基盤として確保され、その他に自立(責任・義務の履行)、普遍主義、限定性といった社会規範を習得することによって、はじめて自己の行動を自身で適切に制御するという意味での道徳性の発達―「生きること」の態度・能力―が可能になると考える。<sup>(6)</sup>この単純化してみた知識・技能の側面と道徳的側面の両者の関連構造をおさえないで、ただ「生きることの教育」を説いても片手落ちといわなければならない。

この点は、宇留田教授自身、主張される「生きることの教育」は、即「生徒指導」であるという論法に典型的に示されている。すなわち、「これまでに掲げてきた『生きることの教育』の本

質に即した教育実践を生徒指導と呼ぶことにしたいと考える。したがって『生きることの教育』は、単なる『しつけ』の教育でもなければ、またいかに立身出世をするかという処世術の教育でもない。子どもたちの生活全体やその根庭にあるものの見方、感じ方、考え方さらには人格の全体を問題にしながら、かれらが現代社会において自己実現を図るための基盤となる態度、能力を育成する教育と考えることができよう。<sup>(7)</sup>」という考え方である。これでは、意地悪く解釈するならば、形式的に領域区分した場合、教科指導の方はどうしてもよく、先の6点に沿った生徒指導が行われる学校が今日望まれるということにもなりかねない。<sup>(8)</sup>

## 2. 学校における生徒指導の基盤・基本原則

今日の学校教育の問題状況の把握ないし学校の機能論におけるある程度の不十分さは前述したごとく認められるが、今日生徒指導充実の課題が緊要であり、その方向がどのようなものとしてとらえられうるかという点については、基本的に宇留田教授の所説は是認されてよい。しかし、個別学校の経営にあたって具体的に生徒指導の課題を折出し、その解決の方途を探る前に、そもそも学校教育における生徒指導の機能が成立する基盤ないし基本原則について一定程度明確にする必要がある。

筆者の学校機能論において、大まかではあるが、知識・技能の側面と道徳的側面からその両者の関連構造をすでに示したが、この両者は生徒の側に立ってみると学習のメカニズムが根本的に異なるものといえる。きわめて単純化していえば、知識・技能面の学習は教育者の教材提示・説明・演示等を模範にして学習者(生徒)がほぼそれと同様にまねるという行為—つまり模倣(imitation)—が媒介されて行われるが、道徳的側面(価値態度)の学習は、教育者(教師ばかりか生徒の場合もある)との同一視(identification)を媒介にして成立するといえる。つまり前者は、教育者(教授者)に対するカセクシスを必ずしも必要としないが、後者では個々の生徒にとって意味ある他者(significant others)にカセクシスを注ぎ、彼と同一視することによって学習がなされるのである。

したがって、学校教育における生徒指導は、一人ひとりの生徒が、教師および主として学級の仲間に対して人間としての信頼感を寄せ、自己にとって彼らの存在を意味ある他者と受け留めなければ成立しない学校の機能なのである。いいかえれば、学校の教師の生徒に対する制度的権力の強制力によっては期待できないものなのであり、とくに教師の場合、教師自身の人格の高潔さや魅力に対する生徒の自然な信愛や敬服の感情が基底にあってはじめて、十全な機能が期待できるのである。よって、いくら教師が生徒指導に熱意をもって取り組むといっても、この前提条件を欠いては生徒指導は成り立たないのである。

ところが、教科指導の方は(形式的に区分するというと)このような教師に対する自然な信愛や敬服の情を欠いていても、知識・技能面での優秀性を保持している限り、生徒はそれに従い、一

定水準の学習は成立するとみられる。というのは、それをしないと成績評価という手続きを通して、生徒の将来の生活に関わる資格の獲得がおびやかされるという統制メカニズムが学校社会に強く働いているからである。

また、生徒指導の機能が、教師によってばかりか、生徒同士の集団生活の過程でも生ずることを深く認識しておかなければならない。生徒が主として学校の仲間同士信頼感を寄せ、互いに心を開き他者のすぐれた点を認めそれを自己に取り入れようとするような価値態度の学習がそれである。とくに、生徒の学校生活の主たる単位である学級集団が単なる形式的な所属集団(membership group)ではなく、心理的な一体感で結ばれた準拠集団(reference group)になることによって、この面での生徒指導の機能は飛躍的に増大するといえる。もちろん、学級集団が所属集団から準拠集団そしてさらには生徒の自己指導の能力が高まった自治集団になるかどうかは、主として教師の指導性(リーダーシップ)の要因に左右されるところが大きいことは言うまでもない。<sup>(10)</sup>

このようにみえてくると、基本的に学校教育における生徒指導の機能は、学級指導や個別生徒への教師の学業・適応・進路等の問題をめぐる教育相談(カウンセリング)活動といったフォーマルな面の指導もさることながら、その背景にある生徒の学校生活全般をとおしてのさまざまな校内の人間関係のあり方が深く関わっているとみることができる。この学校における集団関係や文化の面は、いわば学校の潜在的カリキュラムと呼ばれる性質のものであって、特別意識化されたり、言葉にしたり正当化されないだけに、むしろ生徒にとっては大きな意味をもつと考えることができるのである。<sup>(11)</sup>

ところで、以上述べた学校の生徒指導の基盤ないし基本原則は、宇留田教授の論稿においては、部分的には論及されているものの、体系的にかつ詳細には明らかにされていないとみられる。とくに教師-生徒関係はいうまでもなく生徒同士の集団関係や文化といったフォーマルな様式以外の潜在的カリキュラムとしての生徒指導機能への着眼がまともになされていない点に率直に言って疑問を感じざるをえない。

### Ⅲ. 学校経営における生徒指導体制・機能考究の枠組

#### 1. 学校経営の全体構造における生徒指導の位置

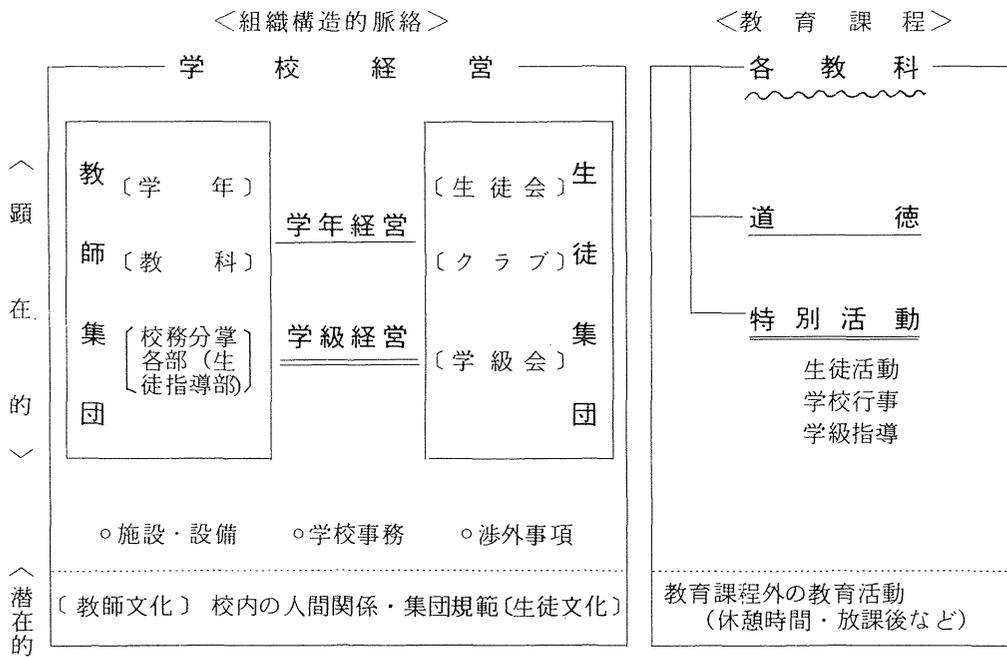
生徒の道徳的側面における社会化を援助する学校の機能は、特定の道徳や特別活動の教育課程上の領域に限定して追求されうるものではない。基本的には、学校のすべての教育活動の中に機能として作用するものである。したがって、学校の教育活動のさまざまな場面の中で、時間数の観点からみて各教科の授業が約5割を占める実情を考慮すると、この教科の指導(知識・技能面)<sup>(12)</sup>での社会化の促進)のあり方も深く関連づけて生徒指導のあり方が考えられなければならない。

ともすると、学校経営の実情においては生徒指導に対する問題関心が、生徒の学校生活への適応

の態様に注がれ、問題行動の指導や規律遵守が生徒指導の中心的課題領域であるかのごとくみなされている傾向がないわけではない。しかし、学校の経営において、前述のような本来の生徒指導の教育活動上の性格を認めるならば、教育課程の編成そして日常的なその実施においてきわめて重要な位置をもっていることが認められる。ただ、その生徒指導の重要な位置は、基本的に学校の教育活動のすべての領域において意図性・計画性・組織性の諸点において多様な様式をもって生徒指導の機能が現出するゆえに、そしてまたそのような意識化された、顕在的な様式によらない校内の網の目のような人間関係および集団規範を通じてさえもこの機能が生起するゆえに、一般には判然と理解されがたいのである。

このような見地からすると、もっとも素朴には、一人ひとりの生徒にとって「学校生活がどのようなものとしてあればよいか」という視点から、学校経営における生徒指導を考えることが肝要であると思われる。つまり、生徒にとっての「学校生活の設計」という広い視野に立って、まずは学校の教育目標の設定、教育計画（展開計画・組織計画）の策定、次にその日常的な学校経営の実施における学校の施設・設備、学校事務、渉外事項等教育活動を支える諸領域を含めた学校活動全般にわたる指示（directing）、調整（coordinating）、統制（controlling）の機能が有効に働いて、はじめて十全な生徒指導がなされうるのである。このような学校経営における生徒指導機能の構造的な理解を取って図示すると、図1のごとくなるであろう。

図1 学校経営における生徒指導機能の構造的な理解のための略図



(注) —, —, ~ の下線は、順次生徒指導機能現出の相対的な強度(強, 中, 弱)を示す。

とくに、この図1において注目されるべきは、生徒指導の機能が潜在的に生起する領域である。つまり、生徒にとっての家庭や地域社会での生活実態とも関係づけて、学校生活の目立たない部面における生徒指導機能を凝視したうえで、学級集団の教科指導を中心とした学習集団の側面と生活集団の側面との統合、あるいは特別活動における生徒活動（学級会活動、生徒会活動、クラブ活動）や学校行事、さらには道徳、教育相談（カウンセリング）活動のあり方を考慮する必要があるわけである。

すると、潜在的な生徒指導機能が現出する校内の多様な人間関係ないし集団規範は、一つには生徒文化の態様、そしてそれと関わって教師文化の態様が問題にされなければならないことになる。生徒文化（その学校の生徒集団に共通にみられるものの考え方、感じ方、行動様式）は、一方では学校の本来の機能に合致した生徒相互間に生起する道徳的側面における社会化（価値態度の形成）を促進する面があると同時に、逆に他方では学校の本来の機能とは逆行する生徒の自我防衛的な適応手段としての機能をもつので、<sup>(13)</sup>とくに後者の実態についての鋭い分析が顕在的な生徒指導体制の構成・改善にあたって重視される必要がある。また、教師文化についても、わが国において顕著な校内教師集団内の行政秩序支持と非支持の価値観の対立や、世代差による教育観の対立等の要素は、各学校の総体的な生徒指導機能の質を左右すると思われるだけに、<sup>(14)</sup>学校経営上相当緻密な検討が要請されると考える。

## 2. 生徒指導体制・機能改善への総合的戦略の案出

今日の学校教育にみられる病理的諸現象は、学校の教育を構成する特定の要件の不備によるものとは考えがたい。ここでの課題対象である生徒指導に限定しても、校内の生徒指導の体制が未整備であるとか、教職員の生徒指導の能力の不備とかの特定の要因のみが、一般的傾向としての生徒指導機能の低迷を招いているとはみなしがたい。むしろ、今日の学校が置かれている社会・文化的諸要因の変動が、学校での道徳的側面の社会化の機能の弱体化の基礎を与えているのであり、学校自体の対応もすでに述べたごとくアチーブメント（業績）本位の教育課程編成を迫られ、生徒の学習が真に彼らの生活実感と結び合い生氣あるものとはなりがたいことが前提的に指摘されねばならない。

そうすると、今日の学校経営において生徒指導の改善のためには、単なる生徒指導の校内体制の改変や、特別活動の各領域ごとの充実の諸施策を講じたところで、それらの方策は部分的な意義はあるとしても、全面的、抜本的な課題解決の手だてとはならないと考える。

そこで、今日の学校の生徒指導上の課題をまずできるだけ客観的に学校活動の全般にわたって析出することが必要である。たとえば、教育課程自体が生徒の学習への関心を呼び起こし、生氣に満ちた人格の核心に触れるようなものにはなりがたいものとして編成されていないか、あるいは実施上教師の指導の態様がアチーブメント本位に流されていないか、さもなくば一斉教授の方式がすでに生徒の個人差への適切な対応を困難にしているのか、などの諸点が総合的に検討され

ねばならないのである。この各学校の生徒指導の課題析出の作業は、一方では各学年および各教科ごとに、また各学級での生徒の生活実態に即してきめ細くなくされるばかりか、学校全体としても生徒文化の内実や教師集団の醸成する雰囲気等の潜在的な面の生徒指導の機能の態様も合わせて吟味される必要があるのである。

この点で、近年進展しつつある教育評価の研究は重要な視点を提示しえているといえる。なかでも梶田毅一が「学校経営のための教育評価」と題する論稿において、教育課程の評価を核としつつ、さらにより積極的に（梶田は「攻め」の方向性をもつと表現しているが）教育研究開発を志向した評価の構想を提示しているが、まさにここでの論点をきめ細かくしかも体系的に明らかにしている<sup>(16)</sup>ので、大いに参考となろう。

ところで、生徒指導をめぐる学校総体の課題析出の作業が前述したような方向においてなされるならば、生徒指導機能改善の道筋は相当明瞭になると考えられる。たとえば、校内の生徒指導体制が学級担任教師に任せられすぎ、学校全体としての総括的追求が弱くなっている（いいかえれば校務分掌としての生徒指導部門の機構が設けられていても、日常の各教師の行う諸種の生徒指導活動を調整し統括する体制が不備である）とか、逆に表向き生徒指導部門が活発に活動し、学校全体の生徒指導機能充実への種々の方策を講じているが、日常的な諸種の生徒指導活動に深く浸透していないとかの実態が明白となれば、どのような改善策がとらべきかは、さしてむずかしい問題ではないのである。先の例では、生徒指導部門の人事構成や機能面の充実が主要施策として考えられようし、後の例では生徒指導部門の活動内容の是非や一般教職員の生徒指導への取り組みの姿勢や力量が検討されることになるだろう。

ただ、生徒指導の体制の改善も、実際上は生徒指導機能の内実（質）と関わって考えられる性質のものであるから、何といても個々の教師のレベルでの生徒指導への関心や能力のあり方、そして校内教師集団の総体的な生徒指導への取り組みのあり方が最大の焦点となつてこよう。教師の教育活動において、教科指導の面の専門性も相当微妙で複雑な性質を孕んだものではあるが、生徒指導面の専門性はいっそう高度なものと考えられる。つまり、指導内容についての理解力（学識）の高さという条件が一応生徒に対しての指導一被指導関係成立のよりどころとなる教科指導の場合とはちがって、生徒指導においては人間としての真価、人格的魅力を基礎にして（レポートの成立）、なおかつ個々の生徒への共感的理解の能力や集団の質的發展を導き組織する実践的能力が要求されるのである。

この意味で、究極のところ学校経営における生徒指導の改善は、教師の職能成長を学校としてどう計るかという問題に帰着するとみることができよう。したがって、個々の教師が教科指導を含めて広く自己の指導態様の不備をきめ細かく吟味し、その改善を図ることは当然として、学校の経営体制のなかにそれを教師集団の共同努力として可能にする緻密な組織的方策を用意することが要請される<sup>(17)</sup>。その際、よく指摘されるのは校内研修体制の整備であり、その質的改善である

が、ここではいわば顕在的な方策以前の教師の意識構造自体をも対象とされるべきことを強調しておきたい。

小学校の場合、全教科担任制という教授組織形態がとられるだけに、自己の担当する学級への同一視は通常相当強くなり、結果的に悪しき意味での「学級王国」の様相を呈することが少なくない<sup>(18)</sup>。もちろん、それぞれの教師の特性や創意が生かされて、特色ある学級集団ができること自体は頭から否定される必要はないが、明らかに児童指導面での不備が認められる際に、同僚教師や管理的立場にある職員がその実情をおおむね認知しながらよほど異常な事態にでも至らない限り手を下そうとしないことがある。このようなケースが起きるのは、端的に言って教師の個人主義(individualism)という意識構造が厚い壁となっているのである。もっとも、自らの指導態様や能力の不備を認識して、謙虚に同僚教師に助言や指導を得ようとする教師ならばその心配はないが、そのような良心的な教師でさえ、やはり「これ以上は干渉されたくない」とする無意識の自己防衛の境界線をひいているものなのである。

このことは、中学や高等学校になると、事態はいっそう深刻である。つまり、教科担任制という教授組織形態が、教科という専門の枠に逃避しやすい教師の意識構造を助長し、相対的に生徒指導面の機能の追求が弱くなる性質をもっているからである。したがって、中学や高等学校、とくに後者においては、そもそも教師の学級経営に対する意識が一般的に高くなく、よほどのことでもない限り自己の学級の生徒指導の態様について同僚教師との協議を積極的に希望する教師などまれなのである。

よって、決して生徒指導面だけに限定されないことではあるが、まず校内の教師集団が形式的な指導責任の分担の体制の枠を越えて、生徒たちを組織として教育する役割をもつ学校の構成員として辛く厳しいことではあるが、互いの指導態様や能力の是非について、謙虚に吟味・検討し合う教師集団の規範を醸成することが肝要となってくる。つまり、一人ひとりの生徒を、校内の教師のそれぞれが見つめ、彼らに最善の手を協働して尽くしてあげることこそが、学校教師の職業人としての基本姿勢であるとする価値観を共有することが望まれるのである<sup>(19)</sup>。

以上述べたごとく、単に生徒指導の体制や具体的諸方策の改変の次元のみでなく、充実した生徒指導の現出を阻む教師の意識構造の壁の打破という次元をも含む、総合的な生徒指導改善の戦略の案出が、今日の深刻な学校の状況からみて不可欠の課題と考えられる。少なくとも、学校経営の研究レベルにおいて、ここに提示した基本的視点からの生徒指導論の体系的構築が、強く望まれていると思う。

#### IV. 結 び — 宇留田教授の生徒指導論の発展的継承へ向けて

これまでの考察は、宇留田教授の生徒指導に関する奥行きのあるしかも重厚な諸業績について、その核心ないしは中心的な論点を避けてあたかも周辺の問題を正面に据えて論究してきた弊は

率直に認めなければならない。

宇留田教授の所説の特徴の一つとして、生徒(児童)の書いた作文を素材として取り上げ、鋭い考察を加えられたり、あるいは教師の実践記録から、そのエッセンスを引き出し、生徒指導のあり方目的を射るような論究がなされている点を挙げてよいであろう。この種のセンスの鋭さないし巧みさは、教授自身の若い頃の教育実践や教育行政当局の専門スタッフとしての豊かな実績に裏づけられたものと思われる。しかし、筆者はこうした生徒指導の各領域別ないし具体的実践論における教授の所説の有効性や説得性を十分認めつつも、今日の学校の状況に照らして生徒指導問題が論究される際の前提的な論点ないし考究の枠組が、筆者には必ずしも肯定的に受け入れがたいと判断したゆえに、結果的には宇留田教授の真価を損ねるような叙述をしたきらいはない。ただ、学校経営の全体構造を十分に把握したうえで、しかも学校での日々の生徒指導の諸種の活動を明確に方向づけうる太い軸ともなるべき論理を備えた生徒指導論の構築が今日強く要請されると考えたので、非力を顧みず本小論を展開した次第である。すなわち、筆者の立場からみた、宇留田教授の生徒指導論の発展的継承の視点をいくらかでも明らかにしようというのが、本稿の意図したところであり、未熟さは拭えないものの一定程度その意図は達せられたと考える。

その主要な論点を要約すると、(1)学校の総括的な機能論を提示したうえで、生徒指導の意義や方法が明らかにされるべきこと、(2)生徒指導の機能が基本的に学校の全ての教育活動において現出するものであるから、教科指導は言うまでもなく、潜在的な生徒指導の機能をもつ生徒文化や教師文化の問題領域も正当に位置づけた論究がなされる必要があること、の2点になる。

しかし、これまでの叙述では子細に論究できなかったが、実はもう1点宇留田教授の業績の発展的継承の指標として、次の点を指摘しておきたい。それは、先のⅢ-2で述べた学校の生徒指導の総合的・客観的評価(研究開発を志向した評価)の必要性に関するものである。この総合的・客観的評価を行うことは、当然個別学校の生徒指導上の内部努力の課題がかなり明瞭にとらえられるばかりか、実は個別学校のレベルでは解決困難な課題が明らかになると同時に、個別学校を超えた「公教育システム全体への寄与」が可能となるという意義を強く主張しておきたいのである。今、梶田叡一の所論を生徒指導に関連づけて言えば、生徒指導に関する「国や地方・地域の基準や指導を学校の現実に適用してみることによって、その妥当する条件や留意点を教育関係当局にフィードバック」できること、そして「現在の子どもと教師の諸条件に適した様々の〔生徒(児童)指導上の〕創意工夫を、他の多くの学校や教育関係当局に対し提言」しうるという意義である(〔 〕内筆者)。<sup>(21)</sup>

もちろん、本稿で論じた以上三つの宇留田教授の生徒指導論の発展的継承への視点ないし指標も、ごく大雑把な方向を示したに過ぎず、十分内容が整えられたものとはいいがたい。そのより緻密で体系的な論展開については、他日を期したいと考える。

## 注

- (1) 本稿で素材にした宇留田敬一教授の生徒指導に関する著作ないし論文は以下の通りである。
- I 一 『生徒指導入門』, 明治図書, 1974 (5版)
  - II 一 『(特別活動研究双書1) 集団活動の理論と方法』, 明治図書, 1974
  - III 一 「学級集団の編成」, 宇留田敬一他 『(現代学校経営講座2) 学校の組織・編成』, 第一法規, 1976所収, pp. 1-51
  - IV 一 「生徒指導と教育経営」, 河野重男・永岡順編著 『(教育学講座19) 現代の教育経営』, 学習研究社, 1980所収, pp. 233-242
  - V 一 「生きることの教育」, 吉本二郎他編 『(新教育を創造する学校経営4) 全教職員が担う児童・生徒指導の経営』, 東京書籍, 1980所収, pp. 9-48
  - VI 一 「児童・生徒指導の組織」, 吉本二郎他編, 同上書所収, pp. 113-143
- なお, 以下の引用ないし参考文献の記載にあたっては, 「宇留田敬一, I」のように略記する。
- (2) 宇留田敬一, IV, pp. 210-213
  - (3) 宇留田敬一, V, pp. 28-30
  - (4) 柴野昌山, 「学校の逆機能 — 社会化困難性をめぐって—」, 『教育社会学研究』, 第27集, 1972所収, p. 52 参照。
  - (5) 宇留田敬一, V, pp. 32-47
  - (6) Smith, L. M. & Schumacher, S., The School as Socializer, in Goodlad, J. I. & Shane, H. G. (ed.), The Elementary School in the United States, 72nd Yb. of NSSE (Chicago: The Univ. of Chicago Pr., 1973), pp. 305-306
  - (7) 宇留田敬一, V, p. 48
  - (8) この論稿に限って言えば, 教科指導の現状について, 「教科を通して人間形成を図るという機能を失っている場合も少なくない」(p.27)との指摘がなされているが, それ以上教科指導については論及することなく生徒指導の充実を説くのは, 学校論(機能論)としては偏りがあるといわなければならない。なお, 宇留田教授の別の論稿, たとえばIIIでは, 学級集団論の脈絡において教科指導との関係を重視した生徒指導論(生活集団としての学級集団の意義等)は展開されているが, 総体的にみて知識・技能の側面と道徳的側面との学校の社会化機能としての両者の関係の把握は明確さに欠けるという難点は免れがたい。
  - (9) 武内清, 「学校と生活指導」, 河野重男・新井郁男編 『(現代教育社会学講座4) 現代学校の構造』, 東大出版, 1976所収, P. 167
  - (10) 吉本均「学級集団と人格形成」, 原俊之他編 『(教育学全集12) 集団と教育』, 小学館,

1968所収, PP. 56-84, 森楸「学級集団」, 木原健太郎他編『増補現代教育社会学』, 明治図書, 1976所収, PP. 196-211 参照。

- (11) 武内清, 前掲論文, P. 163
- (12) 久保隆則「教師と児童生徒のふれあいの場をどうつくるか」, 『学校運営研究』, 第246号 (1981年11月号)所収, P. 28 参照。
- (13) 武内清, 前掲論文, PP. 171-172
- (14) 柴野昌山, 前掲論文, PP. 59-60 参照。
- (15) 教科指導の一斉教授方式のもつ生徒指導面の弊害についての宇留田教授の論究は, 教育内容面のアチーブメント本位の傾向とも関連づけて, さらには学校の選抜機能にも敷衍して展開されており, 説得力がある。宇留田敬一, III, PP. 6-10
- (16) 梶田叡一「学校経営のための教育評価」, 永野重史他編著『(教育学講座5) 教授・学習・評価』, 学習研究社, 1979所収, PP. 155-161  
なお, 宇留田教授の所論において, こうした生徒指導の学校の総体的評価論が少なくともここでとりあげた諸業績の中では明瞭な形で提示されていない。
- (17) 拙稿, 「学校経営研究における教職研究の基本的視座の検討—教師の職責と職能成長—」, 『学校経営研究』, 第3巻, 1978所収, PP. 83-90 参照。
- (18) この点について次の調査研究報告は, 米国のものではあるがきわめて説得性に富んでおり, およそわが国の実態にも妥当するものと考えられる。McPherson, G., The Teacher and the Class: An Investigation of the Process and Functions of Identification, in Sieber, S. D. & Wilder, D. E. (ed.), The School in Society: Studies in the Sociology of Education (N. Y.: The Free Pr., 1973), PP. 258-264
- (19) ここでの論点について, 筆者は次の論稿においてやや詳しく論じているので参照されたい。拙稿, 「生徒指導のための教師集団のあり方」, 宇留田敬一編著『生徒指導のための学校経営』, 明治図書, 1982所収。
- (20) 梶田叡一, 前掲論文, P. 159
- (21) 同上論文, P. 160